

「相撲」あれこれ

間 田 笑 子

まえがき

最近、相撲の国際化が進んでいる。日本の国技といわれる相撲の存在も危うくなってきたと、一部の人々の間では心配の声があがっているようだ。一方、日本の相撲が世界に広まることは喜ばしいことではないかとの声もある。しかし相撲は本当に日本の国技なのだろうか。

相撲が国技と定められたのは 1909 年、明治 42 年のことである。わずか 100 年前のことなのだ。

しかも、世界には各地に相撲らしき絵や記録などが多く残っている。そこで、まず世界の相撲について調べてみた。

世界の相撲（格闘技）

1. モンゴル

最も古い相撲の登場はモンゴルにみられる。おおよそ 4 ～ 1.2 万年前には相撲らしきものがあったようだ。

70 万年前には、モンゴルにはすでに人が暮らしていた。相撲の発生の初期は、生活の一部だったように思われる。馬を速く走らせる（競馬）、力強く力士に取り組ませる（相撲）、弓を射る（競射）の技は、狩りによる食料の獲得には不可欠なものだったからであろう。しかし、匈奴（BC 3 世紀～AD 5 世紀）の時代には、すでに天神を祀り、雨乞いをするオポー祭の後に神々に奉納された「男の三つの競技」（競馬、相撲、競射）となっている。

2. 中国

中国では相撲を春秋戦国時代（BC 3 世紀頃）には「角力」とよんでいたようだ。「礼記」に軍事訓練として行われていたことがみえる。「礼記」は孔子の原著で、その中に「武を講じ、射御を習し、以て角力す」とある。ただし、この場合の「角力」は力比べで、必ずしも相撲を意味しない。

魏晉南北朝（A D 3 世紀頃）にはじめて「相撲」という文字がみえる。しかし、これはもともと漢字には無く、釈迦伝の「本行経」を 590 年ころインド人の手によって漢訳されたとき、「ゴダバラ」（相撲の意）を新語として「相撲」という語を創作したものと思われる。宋時代（A D 10 世紀）には「争交」とよんでいたようだ。

3. ベトナム

ベトナムでは、力士は、安陽王（アン・ズオン、？～B C 208）の時代、武官登用試験科目となるなど、宮廷の軍人として活躍していたとある。ちなみに残っている相撲図は裸に褌一つで、日本のそれと全く同じである。

4. 朝鮮

朝鮮では、A D 2～7 世紀頃の高句麗の古都輯安（しゅうあん 現在は中国）の角低塚の壁画に、「裸の相撲図」があり、また中国の後漢書にも「高麗技」という記述がある。李朝のころは、毎年中秋の節句のころ天覧試合が行われた。後、儒教の教えにより、着衣のまま相撲をとるようになった。今のシムル相撲である。

5. インド

釈迦（B C 566～B C 486、またはB C 463～B C 383）がまだ悉多太子のころ、弟の阿難陀太子、アーナンダ 従兄弟の堤案達多と相撲をとり、この二人を倒して美姫を得たとある。（釈迦伝説「本行経」の「第十三楠術争婚品」）

6. エジプト

B C 5 世紀頃、ナイル河横穴にある壁面に、相撲の取り組みの形をした裸体の男の図がみえる。

7. 古代ギリシア

古代オリムピックで、全裸の男子が相撲のような形で取り組んでいる様子が皿や壺の絵にある。

その他、世界中のあらゆるところで相撲に似た取り組みは行われている。これは人間の本能として当然のことだろう。子供たちが四つに組んだり、手を使って戦う

ということは、世界共通の遊びであろう。相撲は時代が下るにしたがって、それぞれの国でそれぞれの形態で発展していったと思われる。ある国ではスポーツになり、また別の国では儀式になった。

日本の相撲

では、日本の相撲はなぜ「神事」になったのだろうか。日本の相撲について歴史の方面から調べてみた。

(1) 古墳時代

相撲は、もともと日本にもあったと思われる。それは1400、1500年前の古墳時代の遺跡から発掘された埴輪や土偶のなかに、相撲のかたちをしたものを見いだすことができるからである。特に、和歌山県井辺八幡山古墳から出土した埴輪には、褌を締めた裸足の人形が、はちまきを締め、両足をがに股にひらき、腕を前方に伸ばしている男子像があり、相撲をとる姿を想像できる。

文献では、まず「古事記」や「日本書紀」にある神話時代の伝説からはじまる。

「古事記」には、つぎのような記述がある。天孫光臨のときに、大国主命が出雲の国、葦原中津国を占領して、これを皇孫に譲らなかった。そこで、天照大神の派遣した建御雷神たけみかづちのかみと大国主命の御子建御名方神との「力比べ」により勝敗を決したが、これは皇孫方の勝ちとなったとある。いわゆる「国譲り」である。

つぎに登場するのが、第11代垂仁天皇の7年（年号不明）に行われた野見宿禰のみのすくねと当麻蹶速たいまのけはやの相撲である。これは相当激しい戦いだったようで、「日本書紀」に、「七年七月乙亥（七日）当麻蹶速と野見宿禰と力ちから拵くらべをせしむ」（原漢文）とあり、天覧のもとに宿禰が蹶速の脇腹を蹴り折って殺したことが記されている。

これらの神話は、部族間の争いを相撲に託して語られたものであろうといわれている。宿禰、蹶速の話は、新たに渡来した民族（大和族）と、先住民（出雲族）との闘争の話に挿入されたものであろうともいわれている。

(2) 飛鳥時代

相撲が史実として記録に残されたのは、皇極元年（642）からで、7月、百済の使者をもてなすため、健児こんでい（宮中の衛士）を全国から招集したとある。（日本書紀）

健児は「ちからひと」とも読んでいます。その77年後、元正天皇の養老3年（719）に、宮中に初めて「^{ぬきでのつかさ}抜出司」を任命したとする記録が「続日本紀」にみえる。この「抜出司」は相撲人を選抜して監督する役職だった。その他日本書紀には、いくつか逸話はあるが、相撲に関するニュースは非常に少ない。しかし、これは相撲が日常茶飯事のことであって、特別に記録すべき重大ニュースではなかったからではなからうか。むしろ、宮中では武術の鍛錬と余興としてとらえられていたようだ。

(3) 奈良時代

相撲が神事として登場するのは聖武天皇（724～749）の時代である。

それまで相撲は、地方にあっては豊作を願う行事であり、中央にあっては貴族たちの娯楽として行われてきた。「今昔物語集」にもその一端がみえる。

神亀5年（728）4月、諸国の郡司に対して相撲人を貢進するよう命令が出された。また、万葉集の雑歌に、天平2年（730）^{ことりつかい}部領使を任命し、相撲人を各地から徴発して召し出させた。相撲人は左・右近衛府に配属された。ちなみに部領使は「^{こととり}事執り」の意味である。

このようなことがあって後、天平6年（734）7月7日に天覧相撲が催され、さらに天平10年（738）にも天覧相撲が行われた。（続日本紀）記録にはわずか二回しか残っていないが、実際にはもっと頻繁に行われていたに違いない。

天覧相撲は、七夕の詩をつくらせる儀式の余興として始まったものらしいが、その後、全国的に庶民の間で行われていた、農作の豊凶を占う農耕儀礼の神事相撲が、このころになって貴族の愛好するところとなり、やがて大規模な国家的年占いの相撲節会になっていったらしい。

そのことが決定的になったのは、神亀2年（725）の大干ばつである。凶作のため困窮した庶民のために、聖武天皇は伊勢神宮や各地の主だった二十一社に勅使を派遣して、神の加護を祈願された。その翌年、諸国が豊作になったので、天皇は諸社にお礼参りの幣帛^{へいはく}を捧げ、その際、神前に相撲を奉納されたことが「年中行事秘抄公記」にみえる。これをもって「神事相撲」の始まりとしている。

しかし、民間では神事相撲は、古く弥生時代から行われていたという、民俗学者の指摘がある。

その形を今なお伝えているのは、大三島（^{おおやまづみ}愛媛県）の大山祇神社の「一人角力」

である。これは、選ばれた力士が目に見えない稲の精霊と、お田植え祭り（旧暦5月5日）には豊作を祈願し、抜き穂祭り（旧暦9月9日）には豊作を感謝して相撲をとり、神をお慰めする行事である。その他、地方には似たような神事が今ものこっている。

これらの神事から日本における相撲の発展の経過が分かる。島国であった日本は、大陸からの侵攻を受けることが無かったために武術として発達しなかったのだろう。また、農耕民族であったがために、天候や害虫の被害に悩まされた、豊作を祈る農民の必死な祈りが、神への奉納という形になったのだろう。

平安時代に入ると相撲は年々盛んになり、七夕祭りから離れて、「相撲^{すまいのせちえ}節会」という儀式に発展した。そのころは、「今昔物語集」のなかで学習したような強い力士が、口さがない京雀の口^{ほめけら}にのぼって「被讚れ」たことだろう。

こうして相撲は神事となった。

その後、相撲は「天覧相撲」から平安時代を経て、「上覧相撲」（鎌倉時代）、「武家相撲」（戦国時代）、「勸進相撲」（江戸時代）そして「近代相撲」へと変化していくのである。

相撲がもたらした文化

ここまで、相撲の歴史について述べてきたが、最近、私の尊敬する丸谷オ一先生が、朝日新聞の文化欄に興味深い意見を述べておられた。折しも折り、グッドタイミングである。紹介させていただこう。（一部、先生の文をお借りする）

丸谷先生によると、「相撲」と「和歌」は切っても切れない仲なのだという。

先ほど、相撲は七夕の詩を作る儀式の余興として、貴族に愛されたと書いたが、王朝の昔、和歌の重要な発表形態として「歌^{うた}合^{あわせ}」があった。これは、左方と右方の両方のチームが、同じ題で詠んだ歌を一首ずつ出して勝敗を争う、優雅なゲームである。勝敗を決めるのは判者で、その理由も述べる。批評家をも兼ねているのである。相撲の形式と似ている。

しかも、現存するものでは、最も古いとされる歌合「在民部卿家歌合」（仁和年間884～886）で判者を務めた在原行平（818～893・在原業平の兄）は、節会相撲の「相撲司^{すもうつかさ}」（統括者）であったという。そのせいで、歌合には相撲の方式が多く取り入れられているというのだ。なるほど、比較すると相撲と和歌のルールには共通点

が多い。ちなみに、在原行平は、

立ちわかれいなばの山の嶺におふる まつとしきかば今かへりこむ（小倉百人一首）の歌で名高い。

さて、両者の共通点を調べてみる。

- ・左と右に分かれて優劣を決めること。
- ・初期の歌合せでは最初の歌を「^{うらて}占手」ということ。これは相撲では最初に手合わせをする子童（身長4尺・121センチ以下）のことをいう。
- ・最後の歌を「^{ほて}最手」ということ。これは相撲の最高位をよぶ語である。
- ・優劣がつかない場合は「^じ持」とすること。これは相撲で、全く同体で勝負を預かりにしたときに「^{もち}持」ということと同じである。（囲碁でも引き分けの時は「^じ持」という語を使うらしい）などなど…。

このことを見ても歌合が相撲の影響下にあることは明らかであろう。

また、先日の外国人力士の暴力沙汰についても言及されていて、「礼に始まり、礼に終わる」という日本的な美意識を、外国人力士に学ばせるとよいと述べていられる。

これは、一国の文化が複合体であって、相撲が孤立した形で成立していない以上、当たり前のお話である。そこで、日本文化のいろいろな要素に、ある程度親しませるのが賢明な策であるというのだ。たとえば、小津映画とか、寄席・歌舞伎の演芸に連れて行く、あるいは、百人一首が普及したのは江戸時代だから、カルタとりをすすめるのもいいかもしれない。

このように、先生の文は締めくくられている。

日本の文化は、すべての事柄の手順を説明して、「道」として形式化してしまう傾向にあるようだ。そして、儀式化してしまうのが日本の文化の特徴だと思う。茶道、書道、華道…そして相撲道などというふうに。それらは「形式美」を重んじているように見える。しかも、その形式が合理的で、全く動きに無駄がないのだ。民間の農事儀礼を、神事に発展させてしまったのも日本人の特性なのであろう。

このような考え方は、なかなか欧米人には理解しがたいものであろう。なぜなら、彼らにとって、相撲はスポーツであり、勝ち負けこそがすべてであらうからだ。なるほど、西欧にも騎士道というものがあり、同じ「道」がついているけれども、これは、たまたま日本語に訳した言葉が同じというだけなのかもしれない。日本の「相

撲道」は、たとえば「勝負に負けて、相撲に勝った」などといわれるように、心や態度の問題を云々される。近頃、「自分の相撲をとりたい」などと若い力士が言っているが、(実のところ、私にはこの意味がよくわからないのだけれど) 礼儀になつた相撲は確かに見て気持ちいい。

話があちこちへ飛んでしまった。丸谷先生のご意見に話をもどそう。

先生のおっしゃるとおり、外国人力士がいろいろな日本の文化を体験するのも、日本を理解する一助となるはずである。「相撲は礼に始まり、礼に終わる」という相撲の精神は、外国人力士にも、そして、最近の日本の力士にも分かるはずだ。

私が注目したのは、丸谷先生が、「一国の文化は複合体である」と言われたからである。

現在私は、NHKの文化講座で芭蕉の「句合くあわせ」について学んでいる。(芭蕉は、連歌の形式を俳句に取り入れることによって、それまで庶民のものとしていた俳諧を、芸術の域にまで高めようとしていた時期があったという。そのために、弟子たちに作らせた句合の判者を務めたり、序文や跋文を書くことによって、実験的試みをしていて、あるいは楽しんでいた? という一時期があった)

句合は歌合と同じルールで行われている。始めに歌合があり、後に句合が生まれてくるわけだが、私は、句合と歌合との繋がりにしか考えが及ばなかった。なるほど、日本の文化はもっと広い視野で見なければならないということなのだ。

そういえば、相撲の年寄名が「春日野」だの、「九重ここのえ」、「宮城野みやぎの」だのと、荒々しい競技をする者の名としては優美にすぎるのも、あるいは和歌の世界からの逆輸入かもしれない。

また、尾崎左永子氏は、「源氏物語」の紫の上と秋好中宮の「春秋のあらしおとめい(「少女」・「胡蝶」)のなかで、日本に古くからある詩歌の春秋あらしも、おそらく農耕儀礼から来ているのではないかと言われている。

このようにすべての日本の文化は、すべて連綿と繋がっているのだ。日常の小さな事柄のひとつひとつに、日本の悠久の歴史を感じるといえば大袈裟だろうが、相撲の歴史をひもといていく中での新鮮な感覚だった。そして、このような農耕儀礼が、やがて、日本独特の神道に発展していき、すべての文化の基礎となるのであるが、これは今後の課題として考えていかなければならない宿題だとも感じた。

(平成 18 年 9 月 記)

参考文献（インターネットサイトを含む）

「相撲の歴史」	池田雅雄著	平凡社	昭和 52 年
「今昔物語集の鑑賞と批評」	長野嘗一著	明治書院	昭和 53 年
「王朝の香り」	尾崎左永子他著	京都書院	平成 09 年
「袖のボタン」	丸谷オ一著	朝日新聞	平成 18 年 8・8 付

<http://saitama.m78.com/bunka11.htm>

「korean culture 繕識松硯（朝鮮相撲）」

<http://homepage3.nifty.com/mongolboh-sumo/inscb5.shougou.html>

「モンゴル・日本両国相撲」

<http://www2.starcat.ne.jp/~v-vnhat/dokuriyutousou.htm>

「大学教授のベトナム講座 vo viet nhat 著」

<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/200406/fangtan.htm>

「放談ざっくばらん・中国の角力と日本の相撲をみる 北京外国語大学日本語学部主任 汪 玉林著」